

大乘阿毘達磨集論 (Abhidharmasamuccaya) の諸問題

——和訳と研究——

舟 橋 尚 哉

はじめに

無著造といわれる『大乘阿毘達磨集論』(Abhidharmasamuccaya) は、梵・藏・漢の内、梵本はラーフラ・サーンクリトヤーヤナがチベット寺院で見つけた見葉の断片のみで不完全であるが、チベット訳と漢訳は揃っている。

梵本としては、ブラダン氏のテキストもあるが、これはゴーカーレー本の欠けているところを還元梵語で補ったものであり、しかも漢訳からの還元梵語^③と思われる箇所も少ないので、ブラダン本を用いる場合は特に注意を要する。

この『阿毘達磨集論』(Abhidharmasamuccaya) は、唯識思想と阿毘達磨思想との接点に立つ重要な論であるが、早

くからこの論と『唯識三十頌』安慧釈との類似点が指摘されている。

最初に指摘した人は、多分、ブラダン氏であると思うが、彼はテキストを出版する時に、その Introduction において六ヶ所の文章について、両論の類似点を指摘している。その後、高崎正芳氏^⑤はブラダン氏の指摘個所の他に、いくつかの類似点を見出し、研究発表している。

タティヤ氏も Abhidharmasamuccaya-bhāṣya を出版するときに、Introduction において両論の類似点について六ヶ所の文章に関して言及しているが、しかしこの六ヶ所の内、三、四ヶ所はすでにブラダン氏か高崎正芳氏が指摘したものである。

このように『阿毘達磨集論』は『唯識三十頌』安慧釈と密接な関係にあり、また阿頼耶識^⑦や唯識三性説^⑧・三無性説^⑨も説かれているので、唯識思想と密接な関連をもつ論書であると考えられるが、唯識教学の中では特異な存在と思われる所説もある。

例えば十二有支と三雑染の関係では、一般に「無明」と「愛」と「取」は煩惱雑染であり、「行」と「有」は業雑染であり、その他の「七支」は生雑染であるといわれていて、『中辺分別論』『瑜伽論』^⑩更には『俱舍論』^⑪にもこのように説かれているが、『阿毘達磨集論』だけは「無明」と「愛」と「取」は煩惱雑染であり、「行」と「識」と「有」は業雑染であり、その余の「六支」は生雑染として説かれている。すなわち、「識」を生雑染ではなく、業雑染^⑫としているのである。

以上の如く、『阿毘達磨集論』(Abhidharmasamuccaya)は唯識思想と阿毘達磨思想との接点に立つ重要な論でありながら、『阿毘達磨集論』独特の所説もあり、この論の思想的位置を説明することはむづかしい。

小生もこの論については、『大乘阿毘達磨集論』(Abhidharmasamuccaya)並びにその註釈書(Abhidharmasamuccaya-bhāṣya)の和訳」ということで、当研究誌に昭和

五十七年と昭和六十一年と二回、私が興味をもって「決択分法品第二」の和訳を試みたことがある。

今回もこの小論の前半においては、先の二回の和訳の続篇を載せ、後半においては『阿毘達磨集論』の諸問題について論じたいと考えている。この考察によって、この論の思想的立場が少しでも明らかになればと念願している。

一 和 訳

〔集論の和訳〕

「諸法中において、どのようにして法に善巧である人であるのか。多聞(balamsuta)に依ってである。どのようにして義(artha)に善巧である人であるのか。阿毘達磨(abhidharma)と毘奈耶(abhivyaṅya)とにおいて相(lakṣaṇa)を知るに依ってである。

どのようにして文(vyañjana)に善巧である人であるのか。能く訓釈(sunructi)の文を「知る」^⑬ことに依ってである。

どのようにして訓釈(mirukti)に善巧である人であるのか。「我である我である」^⑭という方言に執著しない随説(anuvyavahāra)を知る人に依ってである。

どのようにして前際と後際との密意に善巧である人で

あるのか。前際を受持することと、後際を出離すること
 「を知る人である」^⑬に依つてである」

* * *
 [Bhāṣya の和訳]

§ 129 (Tattva 本 p. 101, l. 1) 「尊者阿難によつて次の如く
 説かれている。長老舍利弗よ、五種の法を具足する比丘は
 速やかに受持するという、この経中に、この同じき五法に
 よつて速やかに受持する等の四種は所応の如く知らるべき
 である。」

四種とはどのように考えられるのか。

(i) 法に善巧である人は、速やかに受持する。多聞によ
 り、多分、句と文の差別ある人であることによつてである。
 (ii) 義に善巧である人は、多く受持する。阿毘達磨等の
 相を知る人であることの故に、蘊界等の所説の事に関して、
 多くの本文を集めるからである。

(iii) 文に善巧である人と、

(iv) 訓釈に善巧である人は、よく撰持されたことを受持
 する。

よく訓釈の文を知ることにより、また我である我である
 という方言に執着せず、随説する人を知るにより、本文と
 義とを不顛倒に執えるからである。

(v) 前際と後際との密意に善巧である人は、受持して失
 わない。先に受持した諸法に依つて、後に出離するべきで
 あるという、仏の密意を知る人であるからと、証得によつ
 てその真髓を執るからである。

* * *
 [集論の和訳]

「どのようにして諸法において、法に住する者となるの
 か。修「慧」に依らないで、唯だ聞と思の加行によつて
 では、法に住するのではない。聞と思に依らないで、唯
 だ修「慧」を加行するによつてでは、法に住するものと
 はならない。兩者（聞思と修）に依つて、兩者に住する
 によつて法に住するのである。」

受持し、誦誦し、説法することによつて聞所生の「慧」
 が見らるべきである。

三昧における加行と満足しないことによつて、修所生
 の「慧」が見らるべきである。「三昧の」加行は無間にし
 て、恭敬しての加行であり、無顛倒なる加行と見らるべ
 きである。満足しないとは、味著しない、より上の寂靜
 の加行と見らるべきである。

* * *
 [Bhāṣya の和訳]

§ 130 (Tatia 本 p. 101, l. 11) 「大徳よ、法に住する比丘は

法住比丘^②であると語られるという、この經典中に、世尊によつて聞と思と修とのすべてに住するによつて法住者となり、「聞思修の」いずれか一つの加行のみによつてでは「法住者」ではないと「世尊によつて」説示されている。

その場合、多く究竟し、読誦し、宣説し、また多く尋思し、これによつて唯だ聞と思だけが加行されるのであつて、修は加行されない。瑜伽等を捨てるが故に、それ故に法に住するものとは設定されない。

またもし人あつて何らかの聞と思に依らないで、唯だ修〔慧〕を加行する人があつても、かの人もまた法住者とは設定されない。

それ故に、ともかくも法住の比丘に關して、〔世尊は〕^③『ここで比丘が契経 (sūtra)・応頌 (geya) といつた法を究める』と広説するによつて説かれた、その後で〔世尊が〕『瑜伽を捨てない』と云々、と語られた。

すなわち、聞と思と修を知つて、この兩者（聞思と修）に住するによつて、法住者であると知らるべきである。

瑜伽^④を捨てないと、かくの如き等によつてとは、三味の加行に満足しないによつて、修所生〔の慧〕が説示された。

三味の (Tatia 本 p. 102) 加行とは、また二種が説示され

る。

(i) 無間に恭敬する加行の所摂は、瑜伽を捨てないといふ、これによつて〔説かれた。〕

(ii) そして無顛倒の加行の所摂は、作意を離れない、といふことによつて〔説かれた。〕

足るを知らずとは、内心は寂靜を捨てないといふ、このことによつて説示される。これに味著しないことにより、より上の寂靜の加行により、この人には〔瑜伽を〕捨てないといふことが知らるべきである。(未完)

Tatia 本の訂正

p. 101, l. 1 chariputra-dharmāḥ → chariputra dharmāḥ

p. 101, l. 6 niruktikulas → niruktikusalas

p. 101, l. 9 udgahitān → udgṛhitān

p. 101, l. 14 śrutacintāprayuktā → śrutacintā prayuktā

p. 101, l. 14 bhavanāprayuktā → bhavanā prayuktā

p. 101, l. 17 bhikṣurdharmāḥ → bhikṣur dharmāḥ

p. 101, l. 19 yāga → yoga

p. 102, l. 3 asaṃtuṣṭir na → asaṃtuṣṭir na

p. 102, l. 4 anāsvādanāduttarāsamaṭhaprayogaḥ

二 諸問題の考察

(1) 十二有支と三雑染

十二有支と三雑染の関係は、一般に

「十二支の中で、無明と愛と取は惑すなわち煩惱である
とされ、行と有は業に属するとされる。残りの識、名色、
六処、触、受と生、老死の七支は業果としての苦である」^⑤

といわれている。すなわち、十二支を惑、業、苦に分類し、
それぞれ煩惱雑染、業雑染、生雑染に配当されている。

このことは『大毘婆沙論』卷二十四に、

「或煩惱業及事為^レ三。無明愛取説名^レ煩惱。行有是業。

余支是事」(大正二七、一一二a)

とあり、同じく卷二十四に、

「三分者。謂煩惱業事。無明愛取是煩惱。行有是業。余

支是事」(大正二七、一一二b)

とあることによつて、比較的早い時代から、無明、愛、取
が煩惱〔雑染〕であり、行、有が業〔雑染〕であり、その
他が事すなわち、生雑染に相当することが定まっていたよ
うに思われる。

5 (舟橋)

従つて当然その後の論書でも、このように配当されてい

る。法勝の『阿毘曇心論』卷五にも

「諸煩惱及業 有事次第生

当知是有支 衆生一切生

無明愛取是煩惱。行及有是業。余支是事」(大正二八、八

六〇b)

とあり、また法救の『雜阿毘曇心論』卷八にも、

「三有支煩惱 二業事則七

七名前有支 五則説後分

三有支煩惱、二業、事則七者。謂無明愛及取三有支。是

煩惱。行及有二支是業。余支説事」(大正二八、九三五c)

と説かれている。

また『俱舍論』卷九にも、

「三煩惱二業 七事亦名^レ果

略^レ果及略^レ因 由^レ中可^レ比^レ一

論曰。無明愛取煩惱為^レ性。行及有支以^レ業為^レ性。余識

等七以^レ事為^レ性」(大正二九、四九a)

と説かれているように、阿毘達磨仏教では無明、愛、取が
煩惱雑染に、行、有が業雑染に、その他の七支が事、すな
わち生雑染に相当することは当然のことと考えられている。

それでは瑜伽唯識派においてはどうかであろうか。『瑜伽
論』卷五十六には、

「十二支中。二業所撰。謂行及有。三煩惱撰。謂無明愛取。當知所余皆事所撰」(大正三〇、六一二b)

とあって、阿毘達磨の分類と同じように、無明、愛、取を煩惱〔雜染〕に、行、有を業〔雜染〕に、その余の七支を事、すなわち生雜染としている。

また『瑜伽論』卷十には、

「十二支幾是煩惱道。幾是業道。幾是苦道。答三煩惱道。二是業道。余是苦道」(大正三〇、三二五b)

とあり、卷十の最後には、

「三種雜染。謂煩惱雜染。業雜染。生雜染」(大正三〇、三二八b)

とあって、三種雜染の名称が説かれている。

『中辺分別論』相品にも、

「それなる、この〔十二支縁起〕は

『三種、二種、および七種の雜染〔の存在〕である。

虚妄分別の故に』(相品第十一偈c. 1d)

三種の雜染とは、(一)煩惱雜染と(二)業雜染と(三)生雜染とである。その中、(一)煩惱雜染とは無明と愛と取とである。

(二)業雜染とは「諸」行と有とである。(三)生雜染とはその余の「七」支である」

とあって、十二有支と三雜染との配当の仕方は全く同じで

ある。

しかるにこの『阿毘達磨集論』だけは、十二有支と三雜染との配当の仕方が異なっている。

「支分が雜染に撰せられるという点からとは如何にしてか。無明なるもの、愛なるもの、取なるものという、これらは「煩惱」雜染に撰せられる。諸行なるもの、識なるもの、有なるものという、これらは業雜染に撰せられる。その余のものは生雜染に撰せられる」

ここでは「無明」「愛」「取」が煩惱雜染に、「行」「識」「有」が業雜染に、その余のものが生雜染に撰せられている。すなわち、「識」が生雜染ではなく、業雜染に撰せられる点が従来解釈と異なっている。

Abhidharmasamuccaya-bhāṣya には、ここを註釈して「識が業雜染に撰せられるのは「識」の支分が「行」の習気によって明らかにされるからである」^④とある。

この『阿毘達磨集論』のような考え方について、武内紹晃氏は『撰大乘論』の記述の中に「識」を業雜染とする考え方があり、「無著は識支を一切種子識(種子)としての業雜染と考えたと言える」といわれ、また『成唯識論』の中にも「有る処に識も業に撰めらると説けるは、彼は業種を説いて識支と為すが故なり」とあると指摘されている。

また宮下晴輝氏も『撰大乘論』の Vasubandhu (世親) の註釈や第三の註釈書といわれる Viviriguhyārthapīṇḍa-vyākhyā などの、

「識支が業雑染に含まれるという Asaṅga の見解の特質」^③

ととらえ、

「業雑染に識支が含まれる」という Asaṅga の見解の特質が、撰大乘論にもあらわれているといえる」^④

といわれる。確かに『撰大乘論』には、「識」を業雑染の中に撰しているのではないかと思われる記述もあるのだが、はっきりそう断定しているのではない。

その上、長尾博士は『撰大乘論』の和訳の中で、この箇所について、

「一般に、また本学派でも十二支縁起と煩惱、行為、生の三種の汚染とは次のように対配されている」^⑤

といて、『中辺分別論』の十二支と三雑染との配当関係を挙げておられる。そうすると、長尾博士はこの『撰大乘論』の記述を、『中辺分別論』の配当の仕方を採用しておられ、「識」を業雑染に考えるような、いわゆる宮下氏のように Asaṅga の特色とは考えておられないように思われる。

『撰大乘論』が「識」を業雑染としているかどうかは今

後の問題として（私はむしろ『撰大乘論』のような考え方を、後に『阿毘達磨集論』がはっきりさせたのではないかと思う）、もし『阿毘達磨集論』のような「識」を三雑染の中の「業雑染」に撰するような画期的な説を無著 (Asaṅga) が初めて説いたのなら、その同じ無著が造った『撰大乘論』の中にも、もっとはっきり「識」を業雑染に撰するといふ記述があってもよいと思うのに、『撰大乘論』には「識」を業雑染に撰すると考えてもよいと思われる記述があるといふにすぎない。そうすると、一般的には無著は唯識思想を大成した論書として、『撰大乘論』を晩年造ったと考えられているが、それより以前に『阿毘達磨集論』を造ったと考えることが難かしくなるのではなからうか。なぜなら『阿毘達磨集論』の「識を業雑染とする」考え方が無著の画期的な説であるのに、『撰大乘論』にはそれが明確化されていないからである。それとも『阿毘達磨集論』は無著に仮託された別人の造ったものであろうか。

以上、十二支と三雑染との関係を考察してきたが、「阿毘達磨集論」の「識」を「業雑染」とする説が、伝統的な阿毘達磨仏教や瑜伽唯識派の説とは異なった、この論特有な説であることが、これではっきりしたことと思う。

(2) 二十能作と十因(十能作)

『阿毘達磨集論』には二十能作が説かれている。このことについては、私は『中辺分別論』の十能作(十因)との関連について、以前論じたことがあるが、今回、『瑜伽論』に『中辺分別論』の十能作(十因)とは異なる十因が三回も説かれていることを見出したので、ここに再検討してみようと思う。『阿毘達磨集論』には次の如く二十能作が説かれている。

- 「自性者。謂能作因。自性差別者。謂能作因差別。略有二十種。一 生能作。……………
 - 二 住能作。……………
 - 三 持能作。……………
 - 四 照能作。……………
 - 五 變壞能作。……………
 - 六 分離能作。……………
 - 七 轉變能作。……………
 - 八 信解能作。……………
 - 九 頭了能作。……………
 - 十 等至能作。……………
 - 十一 隨説能作。……………
 - 十二 觀待能作。……………
 - 十三 牽引能作。……………
 - 十四 生起能作。……………
 - 十五 攝受能作。……………
 - 十六 引発能作。……………
 - 十七 定別能作。……………
 - 十八 同事能作。……………
 - 十九 相違能作。……………
 - 二十 不相違能作。……………」(大正三二、六七二b)
- この二十能作の内、第一〜第十まではすでに論じた如く、^⑧

『中辺分別論』の十因に相当している。すなわち『中辺分別論』では、

- | | | |
|--------------------------|---------|----------|
| サンスクリット | 十因(真諦訳) | 十能作(玄奘訳) |
| (1) utpatti-kāraṇa | (一) 生因 | (一) 生起能作 |
| (2) sthiti-kāraṇa | (二) 住因 | (二) 安住能作 |
| (3) dhṛti-kāraṇa | (三) 持因 | (三) 任持能作 |
| (4) abhivṛyakti-kāraṇa | (四) 明了因 | (四) 照了能作 |
| (5) vikāra-kāraṇa | (五) 変異性 | (五) 変壞能作 |
| (6) visleṣa-kāraṇa | (六) 相離因 | (六) 分離能作 |
| (7) pariṇāti-kāraṇa | (七) 廻転因 | (七) 轉變能作 |
| (8) sampratyaya-kāraṇa | (八) 必比因 | (八) 信解能作 |
| (9) sampratyāyana-kāraṇa | (九) 令信因 | (九) 頭了能作 |
| (10) prāpti-kāraṇa | (十) 至得因 | (十) 至得能作 |

『中辺分別論』の十因と『阿毘達磨集論』の二十能作の中の前半の十能作とは、サンスクリットもほぼ一致している。異なるところは、『阿毘達磨集論』の第四 prakāśa-kāraṇa (4) abhivṛyakti-kāraṇa、第六 viyoga-kāraṇa (6) visleṣa-kāraṇa、第十 samprāpaṇa-kāraṇa (10) prāpti-kāraṇa) の三項目のみである。そしてこの三項目はサンスクリットは異なっている。意味内容は大体同じである。次に『瑜伽論』には巻五と巻三十八と巻百とに十因が説

かれている。『瑜伽論』卷五には、

「因等差別者。謂十因四縁五果。十因者。一隨説因。二
観待因。三牽引因。四生起因。五撰受因。六引発因。七
定異因。八同事因。九相違因。十不相違因」(大正三〇、
三〇一a)

と説かれている。ここは無著造『顯揚聖教論』卷十八とも
一致しており、

「十因者。謂隨説因。観待因。牽引因。生起因。撰受因。
引発因。定別因。同事因。相違因。不相違因」(大正三一、
五七〇c)

と説かれている。ここは十因、四縁、五果を論ずるところ
であり、十因の一一の項目については、この文の直後に詳
しい説明がある。

これに相当する Yogācārahūmi p. 106, 4. 17 のサンス
クリットでは、

- (1) anuvyavahārahetu (隨説因)
- (2) apeksāhetu (観待因)
- (3) āksepahetu (牽引因)
- (4) abhiniṣṭhahetu (生起因)
- (5) pariśrahaḥetu (撰受因)
- (6) avahakāhetu (引発因)

(7) pratīyamāhetu (定異因)

(8) sahakarīhetu (同事因)

(9) virodhahetu (相違因)

(10) avirodhahetu (不相違因)

となっている。これらの十因は『阿毘達磨集論』の二十能
作の後半の第十一〜第二十までと殆んど同じである。異な
るところは『阿毘達磨集論』の第一 vyavahāra-kāraṇa
(1) anuvyavahārahetu) ぐらいである。ただし -kāraṇa は
『瑜伽論』ではすべて -hetu となっている。

また『瑜伽論』卷三十八の菩薩地にも、この十因は説か
れている。

「云何十因。一隨説因。二観待因。三牽引因。四撰受因。
五生起因。六引発因。七定別因。八同事因。九相違因。
十不相違因」(大正三〇、五〇一a)

ここは『菩薩地持經』卷三とも一致している。

「云何為十。一者隨説因。二者以有因。三者種殖因。四
者撰因。五者生因。六者長因。七者自種因。八者共事因。
九者相違因。十者不相違因」(大正三〇、九〇三a)
これに相当する Bodhisattvabhūmi p. 97, 4. 10 のサン
スクリットでは、

- (1) anuvyavahāra-hetu (隨説因)

- (2) *apeksā-hetu* (観待因)
- (3) *āksepa-hetu* (牽引因)
- (4) *parigraha-hetu* (撰受因)
- (5) *abhivṛtti-hetu* (生起因)
- (6) *āvāhaka-hetu* (引発因)
- (7) *pratīnyama-hetu* (定別因)
- (8) *sahakāri-hetu* (同事因)
- (9) *virodha-hetu* (相違因)
- (10) *avirodha-hetu* (不相違因)

となっている。このサンスクリットは『瑜伽論』巻五と殆んど同じであるが、第四 *abhivṛtti-hetu* (生起因) と第五 *parigraha-hetu* (撰受因) が、この菩薩地では第四 *parigraha-hetu* (撰受因)、第五 *abhivṛtti-hetu* (生起因) となっている、順序が逆になっている。従って『阿毘達磨集論』は『瑜伽論』菩薩地よりは『瑜伽論』巻五の記述によったものと思われる。

また『瑜伽論』巻百にも十因は説かれている。

「復有十因。一随説因。二観待因。三牽引因。四撰受因。五生起因。六引発因。七定異因。八同事因。九相違因。十不相違因」(大正三〇、八八一b)

この『瑜伽論』巻百でも、「四撰受因、五生起因」とある

から、菩薩地の記述と一致し、『瑜伽論』巻五や『阿毘達磨集論』の順序とは異なる。第六定別因がここでは「定異因」と訳されているが、原語は同じであろう。

さて『阿毘達磨集論』の第十一随説能作は、サンスクリット *vyavahāra-kāraṇa* のチベット語 *tha snad kyi byad rgyu* の「言説因」となっている。随説因ではない。随説なら『瑜伽論』の *anuvyavahāra* の方がよい。どうしてこのようなことになったのであろうか。これは『阿毘達磨集論』が二十能作の内、少くとも後半の第十一〜第二十の十能作を『瑜伽論』から借用したものと思われ、そのときに起った誤写ではないかと思う。

このことは *Abhidharmasamuccaya-bhāṣya* p. 36, l. 16 に *vyavahāra-kāraṇam yathānāmadheyam nimittoḍḍa-rahāṇabhivṛtisyānvyavahāraṇāt*

とあることよって、「随説」(*anuvyavahāra*)との関連が知られ、漢訳の「随説」と梵蔵の「言説」との相異が生じたことが知られる。

『中辺分別論』と『阿毘達磨集論』との先後が確定していないので、二十能作の内から十能作を抜き出したのか、『集論』が『中辺分別論』の十能作と『瑜伽論』の十因とを合して二十能作を説いたのか確定できないが、『集論』

が後半の第十一～第二十の十能作を『瑜伽論』から借用していると思われるから、前半の十能作だけ独特の説を加えたとは考えにくい。(逆にいえば、前半の第一～第十の十能作を『集論』の説とするならば、その十能作だけを『中辺分別論』が引用して自説とするとはとても考えられない。)従って『阿毘達磨集論』の作者は、『中辺分別論』の十能作と『瑜伽論』の十因とを合して二十能作を説いたと考える方が自然であると思う。このことは『中辺分別論』の長行(世親釈)より、『集論』の方が後に成立したことになるのではなからうか。(十能作は『中辺分別論』の弥勒の偈ではなく、世親釈に出ている。)

更に『集論』の十能作の第四 prakāsa-kāraṇa と第六 viyoga-kāraṇa は『中辺分別論』障品の世親釈を参照したのではないかと思われる資料がある。それは世親釈の十能作を説くところで、

abhiyakti-āvaraṇaṃ dhimatve tasya prakāśanīya-
trātī
visleśāvarāṇam anāvarāṇe tasyāvaraṇa-visaṃnyoga-
tvātī

と説かれているが、『中辺分別論』第四 abhiyakti-kāraṇa を『集論』では prakāsa-kāraṇa に、『中辺分別論』第六

visleśa-kāraṇa を『集論』では viyoga-kāraṇa に変更しているが、この世親釈は正しくこれらの関係を物語る資料といえる。ただ世親釈では visaṃnyoga となっているが、『集論』では viyoga である。従ってこれらのことにより、『集論』が『中辺分別論』の世親釈を参照した可能性が強いといえよう。

もっともこの資料は、見方によっては『集論』の十能作の第四と第六とを参照して、『中辺分別論』のこの世親釈ができたのではないかという、全く逆の推測も成り立つかもしれない。しかし先にも述べた如く、『集論』の二十能作の後半の十能作が『瑜伽論』よりの引用であることが、ほぼ明らかになってきた以上、『中辺分別論』の十能作を『集論』の二十能作の前半の十能作としたと考える方が自然であると思う。

このように考えることは『阿毘達磨集論』の成立を『瑜伽論』や『中辺分別論』より、後の成立と考える見方であり、従来の見方とは異なるかもしれない。

更に本論二、諸問題の考察(1)で考察したように、十二有支と三雑染との関係から『集論』が『撰大乘論』よりも後の成立のようにも思われてくることである。確かに思想的には篠田正成氏のいわれるように、修行道の上から「解深

密經、瑜伽師地論から集論・集論釈へ、そして撰大乘論、更に中辺分別論釈、大乘莊嚴經論、唯識三十頌へと発展して行った^⑤といえるかもしれない。

しかし十二有支と三雜染との関係の上からいえば、『瑜伽論』で「業雜染は行と有の二支」とする、いわゆる阿毘達磨の伝統的な解釈をしているのに、『阿毘達磨集論』では「業雜染は行、識、有の三支」としている。この『集論』の説が無著 (Asaṅga) を代表する説であるならば、その後世親釈とはいえ、無著に関係のある偈頌をもつ『中辺分別論』が「業雜染は行と有の二支」とするのは、少し不自然ではなからうか。また無著の代表的な著である『撰大乘論』にも「業雜染は行、識、有の三支」と明言されておらず、思想的にそういう考えがあるというにすぎない。このように考えてくると、『阿毘達磨集論』は少くとも『瑜伽論』や『中辺分別論』よりは後の成立であるといえると思う。

まとめ

この小論の前半では『阿毘達磨集論』と *Bhāṣya* との和訳を、後半では諸問題を考察した。諸問題ではここで論じた二項目以外にも「三性」「三無性」「阿頼耶識」「行相」などの諸問題を論ずる予定であったが、すでに予定の枚数を

超えたので、ここでは「行相」に関して少し珍らしい用例を見つけたので述べることにする。漢訳「行相」の原語は、一般に *ākāra* が多い^⑥と思う。prakāra の場合もある。一方、「識」の原語は *viñāna* ㄷ *Tib. nam par ses pa* ㄷ ある。ところが『集論』には *Tib. nam par ses pa* とあっても、*sk. vijāna* ㄷ はない用例が見出される。すなわち、『集論』決択分法品には *Tib. nam par ses pa* (影印 北京版 122-2-1-3, 122-2-1-5) とあるが、このサンسكريットは *viñāna* ㄷ ではなく *prakārajāna* ㄷ となっている。しかもここには二ヶ所も見出される。確かに *prakāra* を *nam pa* と訳し、*jāna* を *ses pa* と訳すことは可能であるから、このような例は他でも見出されるかもしれない。たまたま私は梵蔵漢を対照して読んでいて気づいたので、紹介するだけである。なお漢訳は「種別智」(大正三二、七四八b) である。

以上、『阿毘達磨集論』は唯識思想と阿毘達磨思想との接点に立つ重要な論書であるといわれながら、唯識思想の体系の中でどのような思想的位置にあるのか、また唯識論書の『中辺分別論』『大乘莊嚴經論』『撰大乘論』などとの先後問題も必ずしもはっきりしていない。私はこの小論で『集論』が『瑜伽論』や『中辺分別論』より後の論書であ

るといふ有力な資料を提示したと思つている。これによいかどうかは今後の研究に待つほかはない。

註

- ① V. V. Gokhale: Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asanga, 1947.
- ② P. Pradhan: Abhidharma-samuccaya, 1950.
- ③ すでに幾人かの学者がこのことを指摘しているが、私の書いた論文の中から、この例に適合する個所を挙げるならば、「法者謂十二分聖教」(大正三一、六八六a)に相当するブラダ本のサンスクリットは *aryasasanam dvadasanga-dharmah* (sk, p. 78, l. 2) であるが、ここはサンスクリット断片の欠けているところである。従つてこれに相当するチベット訳にもこの語は出ていない。(拙稿「大乘阿毘達磨集論 (Abhidharmasamuccaya) 並びに Abhidharmasamuccaya-bhāṣya の和訳」大谷学報第六二卷第三号三七頁註(8)参照) また「尽所有性」(大正三一、六八六c)に相当するブラダ本のサンスクリットは *kṣayabhāvikatā* (sk, p. 80, l. 16) であるが、ここもサンスクリット断片の欠けているところである。チベット訳は *ji sned yod pa* であり、Tata 本 (sk, p. 98, l. 11) も瑜伽論声聞地 (Shukla 本, p. 195, l. 16) も *yāvad-bhāvikatā* となっている。(拙稿「大乘阿毘達磨集論 (Abhidharmasamuccaya) 並びに Abhidharmasamuccaya-bhāṣya の和訳」大谷学報第六六卷第一号二五頁註(9)参照)
- ④ P. Pradhan: Abhidharma-samuccaya, 1950.
- ⑤ 高崎正芳氏「大乘阿毘達磨集論及び雜集論と三十頌安慧釈等との関連について」(印度学仏教学研究第四卷第一号昭三一年一一六頁参照)
- ⑥ 高崎正芳氏「無著・阿毘達磨集論について」(大谷学報第三六卷第二号昭三一年)
- ⑦ N. Tata: Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam, Patna, 1976.
- ⑧ 「一切種子阿頼耶識」(大正三一、六六六a)とか「阿頼耶識及善習氣」(大正三一、六七一b)などと説かれている。
- ⑨ 「初依遍計所執自性觀。第二依依他起自性觀。第三依円成実自性觀」(大正三一、六七五a-b)とある。
- ⑩ 「於遍計所執自性。由相無性故。於依他起自性。由生無性故。於円成実自性。由勝義無性故」(大正三一、六八八a)とある。
- ⑪ この考え方は伝統的なものであり、阿毘達磨仏教では明確化されている。惑・業・苦の分類の仕方からも当然と思われる。(水野弘元博士「業に関する若干の考察」一頁参照。大谷大学仏教学会編「業思想の研究」所収)
- ⑫ 弁中辺論「三雜染者。一煩惱雜染。謂無明愛取。二業雜染。謂行有。三生雜染謂余支」(大正三一、四六五b)
- ⑬ 瑜伽論卷五十六「十二支中。二業所撰。謂行及有。三煩惱撰。謂無明愛取。当知所余皆事所撰」(大正三〇、六一二b) ここで業、煩惱、事であるが、瑜伽論卷十一では「三種雜

- 染。謂煩惱雜染。業雜染。生雜染」(大正三〇、三二八b)とも説かれている。また瑜伽論卷十では「三是煩惱道。二是業道。余是苦道」(大正三〇、三二五b)とも説かれている。
- ⑬ 俱舍論「無明愛取煩惱為性。行及有支以業為性。余識等七以心行為性」(大正二九、四九a)
- ⑭ このことについて論じた論文としては、宮下晴輝氏「業雜染に関する Asaṅga の見解」(印度学仏教学研究第二七卷第一号昭五三年)一七六頁参照。
- 武内紹晃氏「瑜伽行唯識学派における業の諸問題」(雲井昭善編『業思想研究』昭五四年)三七二頁参照。
- 片野道雄氏「撰大乘論における業思想の一形態」(雲井昭善編『業思想研究』昭五四年)三九九頁注⑨参照。
- ⑮ 拙稿「大乘阿毘達磨集論」(Abhidharmasamuccaya) 並びに Abhidharmasamuccaya-bhāṣya の和訳」(大谷学報第六二巻第三号昭五七年)
- ⑯ Gokhale 本' p. 34, l. 24, Pradhan 本' p. 83, l. 2 参照。影印北京版一二二巻二六五—三一八参照。
- ⑰ Pradhan 本' p. 83, l. 4 には vyāñjana[ña]tam とあるが Gokhale 本' p. 34, l. 26 には vyāñjanatam となっている。テキスト訳にも yi ge ses pa nid とあり、漢訳にも「善知訓釈文詞故」(大正三一、六八七b)とあるから、元の

- 写本にも jīa が入っていた可能性もある。しかしおそらく Pradhan は Tatia 本によって補ったものであり、写本には jīa は入っていないと思う。なお Tatia 本' p. 101, l. 7 には vyāñjanajñatvad となっている。jīa が入っている。
- ⑱ Gokhale 本' p. 34, l. 26 号 Tatia 本' p. 101, l. 7 号 ānātmetyeti とになっている。しかし Pradhan (p. 83, l. 5) は ānātmityeti としているのは、漢訳の「我我所」(大正三一、六八七b)によったものと思われる。テキスト訳も bdag go bdag go であるから, ānātma となっているものと思われる。
- ⑲ テキスト訳によって補った。
- ⑳ 五種の瑜伽行のことであろう。
- ㉑ 「速やかに受持する」「多く受持する」等の四種。
- ㉒ sk. p. 101, l. 6 niruktikulas には niruktikulasāḥ の誤まり。
- ㉓ 漢訳は「我我所」(大正三一、七四六b)となっている。
- ㉔ sk. p. 101, l. 9 udgahita には udgrhita の誤まり。
- ㉕ Gokhale 本' p. 34, l. 28, Pradhan 本' p. 83, l. 8 参照。影印北京版一二二巻二六五—四一三参照。
- ㉖ 漢訳「修慧」(大正三一、六八七b)によって補った。
- ㉗ Gokhale 本は「」に入れて補ってある。漢訳「三摩地方便」(大正三一、六八七c)には入っている。しかし Pradhan 本には、テキスト訳にも入っていない。
- ㉘ Sk. utama に対して Tib. gon du du である。
- ㉙ Tatia 本では「法住比丘」という語が二回出ているが、チ

ネット訳では一回のみである。

③⑦ チェット訳によって補った。

③⑧ Tatia 本' p. 101, l. 19 には yāga とあるが、yoga の誤植。

③⑨ Tatia 本' p. 102, l. 3 に *asantuṣṭir na* とあるが、*asantuṣṭir na* ではなく、*sanuccaya* の本文に *na* は見出されなく、篠田ノート p. 333, l. 9 *na* の下の *ンダーライン* はなく。

③⑩ 水野博士「業に関する若干の考察」(仏教学セミナー第二〇号特集号「業思想の研究」)一頁参照。

③⑪ 大正蔵経には「行有是業」とあるが、ここは「行と有が業〔雑染〕の意であるから、返り点を訂正した。

③⑫ 大正蔵経では「謂無明愛及取三有支。是煩惱行。及有二支是業余支說事」とあるが、句読点を訂正した。

③⑬ V. Bhattacharya: *The Yogācārabhūmi of Acārya Asaṅga. Part I 1957, Calcutta p. 232, l. 12* 参照。

③⑭ Dr. Nagao: *Madhyāntavibhāga-bhāṣya p. 21, l. 20* 参照。拙稿「中辺分別論における煩惱と業」(仏教学セミナー第二〇号特集号「業思想の研究」)一九三頁参照。大正三一、四六五b

③⑮ チェット訳と漢訳には入っているが、サンسكريットには欠けている。

③⑯ Pradhan 本にはあるが、Gokhale 本には欠けている。しかしネット訳も漢訳にもあるので、おそらく Gokhale 本の

校正ミス(脱落)ではないかと思われる。

④① Gokhale 本' p. 26, l. 22 参照。

Pradhan 本' p. 27, l. 14 参照。

④② Tatia: *Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam Patna, 1976, p. 33, l. 17*. 参照。

④③ 武内紹晃氏「瑜伽行唯識学派における業の諸問題」(雲井博士「業思想研究」昭五四年)三七二頁参照。

④④ 宮下晴輝氏「業雑染に関する Asaṅga の見解」(印度学仏教学研究第二七巻第一号昭五三年)一七七頁参照。

④⑤ 同 右 一七七頁参照。

④⑥ 長尾博士「撰大乘論和訳と註解上」(昭五七年)一八九頁参照。

④⑦ 『撰大乘論』には「煩惱雑染」「業雑染」「生雑染」の語が説かれるところに、「阿頼耶識」「六識身」「余識」「一切種子識」などの語が見られるが、「識」を業雑染に撰するという記述はない。(大正三一、三三〇～三三一)

④⑧ 勝呂博士も『集論』が『撰大乘論』以前の成立と考えておられるように、これが一般的な考え方であろう。(勝呂博士「初期唯識思想の研究」五四二頁、五四七頁参照)

④⑨ 拙稿「中辺分別論(障品)の和訳並びに研究」(2)(仏教学セミナー第十九号、昭四九年)四五頁参照。

④⑩ 拙稿「十能作と二十能作―初期唯識論書を中心として―」(印度学仏教学研究第二八巻第一号)三二七頁参照。

④⑪ Bhattacharya: *The Yogācārabhūmi Part I, Calcutta,*

1957 参照。

⑩ Nagao : Madhyantavibhaga-bhasya p. 31, l. 23 参照。

⑪ Nagao : Madhyantavibhaga-bhasya p. 32, l. 1 参照。

⑫ 篠田正成氏「阿毘達磨集論における菩薩思想について―撰大乗論と比較して―」(日本仏教学会年報第五一号、昭六〇年)一七四頁参照。

⑬ 篠田正成氏「阿毘達磨雜染論における修行道―初期唯識派論書における修行道の発展―」(筑紫女学園短期大学紀要第二二号一九八七年)二頁参照。

⑭ 『集論』では「行相とは何か」(作何行相、大正三一、六八

六c)と説かれているが、チベット訳は *mam pa* (二六四―五一―)である。ここは還元梵語しかないが、これに相当する *Bhasya* では *akāra* (sk. p. 98, l. 1) となっている。このチベット訳には *nam pa* が二回(一一九―一一二)出るが、サンسكريットは先に出ている当該のものは *ākāra* (sk. p. 98, l. 1) であり、その後では *prākāra* (sk. p. 98, l. 2) となっている。

(平成二年度 文部省科学研究費一般研究Bの成果の一部)

(本学教授・仏教学)

(平成二年十月十七日受付)